昭和二十四年七月三十三日第三種郵便物認可
昭和四十四年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二四三号）

慈光

第二十一巻　第八号

目次

独断思想の危険と無定見の害毒……近角常観……(1)
法信……近角常音……(4)
信仰と母性……福島政雄……(6)
人生問題と絶対他力の信仰……花田正夫……(11)
ともしび……聚墨生……(19)

独断思想の危険と無定見の害毒

近角常観

思想問題において最も危険なのは、独断的に自己を絶対に正義なり、忠誠なりと、ひとりぎめをすることである。常に私は云うように、人間は決して絶対なるものでない、したがって何人も絶対に正確なりと独断することは、そのこと自身がすでに大なる間違いである。くわしく云えば、我こそ正確なりと独断することが、すでに正確でないことに想到（そうとう）せねばならぬ。

聖徳太子が「人みな心あり、心おのおの執（と）るところあり、彼是（ぜ）なるときは我非（ひ）なり、我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖（ひじり）に非ず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ」と云われているのは、実に萬古不磨（ばんこふま）の確言である。

近時（大正十年）重大事件として人世を聳動（しょうどう）した出来事も、つまりは自己を以って絶対に忠誠なり正確なりと自認せるより起った誤謬（ごびゅう）である。

すでに自己をもって絶対に正確なりと独断せる結果、これをもって他に対して強行してはばからず、その極みに狂暴におちいるも、あえて反省、省察するの余地さえ無くなっているのである。

勿論、この見方は余程善意をもって解釈したもので、その間、何等自らかえりみてやましき所なきものと仮定しても、自分の考えをもって絶対に正確なりと過信すること自身が、すこぶる危険な思想である。律法主義や官僚主義の思想は、出発点においてこの大きな誤謬におちいっている。故に横車を押せばおすほど、益々常規を逸することになる。この点においては「是非のことわり、なんぞ能く定むべけんや。相共に賢愚なること、鐶（みみわ）の端（はし）なきが如し。ここをもって彼の人瞋（いか）るといえども、かえってわがあやまちを恐れよ、我ひとり得たりといえども、衆に従って同じく挙（おこな）え」との太子の

聖訓を服膺（ふくよう）せねばならぬ。

この誤謬は官僚主義、軍閥主義がおちいるばかりでなく米国の人道主義をもって自家の専売の如く考えることが、如何に他国に迷惑を与えたかは、明らかな事実である。何となればその人道正義そのものが、自国の立場をもって自分ぎめしたものである。

全体私自身が信仰に入るとき、我は正しいというて他をしりぞけるということが、すでに正しいことでないことに気がついたのが、煩悶の根底であったのである。なんとなれば、私が私をもって正しいと考える如く、他人は同様に自分をもって正しいと考えるであろう。すればつまり何人も自己を中心として正しいと考えることが、人生に是非善悪の争いをひきおこす原因であらねばならぬ。今日の社会問題も労働問題も、みな自己を中心として是非善悪の争いを拡大した現象である。自己こそ正しいと独断すること自身が、すでに大誤謬たることを自覚しなければ、恐らくは思想問題を解決するの鍵を見出すことは出来ないであろう。

このように各々自己を正しいとすること自身が正しからぬとすれば、人生ひとつとして正しいことはないことになる。すればつまり人生は如何にしてもよいということになる。右するも可なり、左するも可なり、極端に言えば御都合主義である。日和見（ひよりみ）をきめこむようになるなんでもよし主義である。結局無定見に安んぜねばならぬ。現内閣（第一次大戦終り、経済的混乱あり、原敬暗殺さる）の如きはたしかにこの見地をとるものといわねばならぬ。故に成り行きに放任してその間に自己の活路を見出そうとする、すこぶる狡猾（こうかつ）不真面目な態度におちいるようになる。いわゆる是々非々（ぜぜひひ）主義の如きは最も巧妙なる御都合主義の標語というべきである。しかしこれもまた、善意をもって解釈すれば必ずしも狡猾なるがためと言うよりも、無定見の結果の必然の成り行きと見ねばならぬ。要するに人生みな絶対正確というものの無しとすれば、是非ともかくせねばならぬという確乎不動の真理なるものはなくなってしまう。

自分ぎめの正義がすこぶる危険なごとく、無定見にものごとを進めることも大きな害毒と云わねばならぬ。そのうえ無定見はどんなこともゆるすことが出来るのであるからかの自分ぎめの正義とも妥協することも出来るのである。こうなれば、害毒も甚しいというべきである。しかも形勢が悪いとなると、たちまち正反対の説に乗りかえることも出来るのである。かくて人生は無秩序の渾沌（こんとん）

となるであろう。

しからばこの渾沌を如何にすべきか、この間に如何にして秩序を見出すべきか、如何にして萬古不易（ばんこふえき）の真理を発見すべきか。

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

このそらごと、たわごと、まことあることなき人生の中に、唯一まことの念仏を如何にして見出すかということが信仰問題である。

そもそも、そらごと、たわごと、まことあることなき人生は、飽くまで相対是非の世界である。しかしてこのまことあることなき人生を悲憫（ひみん）して、如何なる虚仮不実なる者もこれをしりぞけたまうことなく、飽くまでも融和同化したまう絶対真実の大慈悲者が如来である、念仏である。ただ仏のみこれ真実の真理である。

如何なる無秩序の世界も、煩悩具足、火宅無常の世界もこの絶対真実の御親に遇いたてまつりて、はじめて確乎不動、萬古不易の真理を見出すことを得るのである。

しかしこれは自分ぎめの正義、我こそ正義なりとの独断ではない。むしろ自己は、そらごと、たわごと、まことあることなき者なれども、ただこの我を見捨てたまわざる如来の清浄真実に摂取（せっしゅ）せられて、ここにはじめて、歩々着々、一糸ももとるべからざる人生々活の大道が現前するものである。これすなわち、真人生の実現といわねばならぬ。これ絶体無碍の一道である。ここにおいて天神地祇も敬伏し、魔界外道（まかいげどう）も障碍することなく、国家の基礎強固にして、世界の平和おのずからきたるべきである。

「求道」十七巻一号。大正十年二月。

さびしさ

伊藤左千夫

さびしさの極みに堪へて天地（あめつち）に寄する命をつくづくと思ふ

み仏につかへ楽しむ聖（ひじり）人すら灯に親します時ありけらし

心あやぶきものと思ひ知り尊きみ名をせめて申すも吾がこころ暗くしあればみ仏の光こほしみ止む時もなしよき人の心とほれるみ教にわが世百年（ももとせ）楽しきを経め

近角常音先生『御法信』

近角常音

先日も有田武夫君とも話合いたる事に候が、御見捨てなき大慈大悲なることは、われらが如何なる方法をもってもどうしょうなき者なるためなれば、信仰上よりと申して、実際問題に処して別段変れる道があるわけに御座なく、やはり世間上同様に、雨降れば傘をささざるを得ず、病あれば薬を飲むだけのことにて候。

乍去（さりながら）、何程服薬しても、果して如何になり行くやら、全く取り止めのなき人生に候。その取り止めなき人生に、大慈大悲にあいまいらせたるだけが、われらの花に有之（これあり）候。而して夫れは取り止めなき限り、何処までも捨てずとの大慈悲にて候えば、ただこのお見捨てなき御慈悲を仰ぎて、結果の善悪をかえりみず、否（いな）、悪く行ったら行ったで、御見捨てなきを信じて思うがごとく決行する。この外に無き様に存ぜられ候。

小生の何時も申すごとく、聖人の『教行信証』の総序文の導きによりて、阿闍世王、王舎城の悲劇のお示しを渇仰（かつごう）いたしおるものに有之（これあり）候。

頻婆娑羅王（びんばしゃらおう）、韋提希夫人は、あれは平素から仏の教を聞きながら、ついに家庭問題を惹起（じやっき）して大混乱におとしいれてしまったということは、宿業のもよおすところで、如何にも我等の有様を見そなわし下されての善巧といただき申し候。

しかして、その結果、韋提希は獄中に幽閉せられ、はじめて自己の姿に行き塞がりて、如来大悲の救済を仰ぎ、ここに世尊は王宮に降臨して、韋提希のために如来大悲の真心を開闡（かいせん）して下され、お慈悲に接して、はじめて韋提希が救いをこうむりたるということについて、小生は何時も、韋提希は獄中から出られて救済を得たるものでなく、身は獄中にありながら、御見捨てなき念仏一つで無生忍（むしょうにん）を得たるものとのことを力説し居り候。

若し、実際問題がうまく行って救わるるということならば、言い換えれば、獄中より放たれて救われたということでなければ筋が合い申さず。

しかるに身は獄中にありながら憐みたもう御真実だけにて救うていただかれたのに、その御真実は、何処までもお見捨てなきお慈悲の故に、何時の間にか広大のお加護にて獄中より解脱を得て、ついに不孝児、阿闍世王の仏の御許に出掛ける手引をせらるるにいたったということ、これは韋提希の小細工で開けたしやわせでなく、全く大悲の御加護の自然の徳益なるべしと存じ居り候次第に候。

全体この韋提希の得忍（とくにん、三つのさとりをうること）の事件を、小生深く渇仰いたし居る次第に候。御承知のごとく、総序の文のお示しには、直々その事実をうけて

「かゝるが故に知りぬ、円融至徳（えんゆうしとく）の嘉号（かごう）は悪を転じて徳をなすの正智」

と仰せられてあり、この円融至徳の嘉号は、念仏一途（ねんぶついちず）なることは申すまでもなく、次にある悪を転じてとある悪は、王舎城の家庭事件なることは、これまた申すまでも御座なく、しかして、徳をなすの徳は、はじめて韋提希が人生を捨てて本願一つに帰入さしていただきたる味わいと諒解せられ候。ここを小生は、何時も、円融至徳（えんゆうしとく）の嘉号（かごう）丈が、悪を転じて徳となすの正智とお話しいたし居る次第に候。

誠にいらざることを書き立て候えども、小生の申し上げたかった要点は、我等の紛糾せる実際問題は、結局これを基（もと）として、韋提希の如く広大の御慈悲に到らして貰う外になく（これは人生的に解決を与えらるる道理は無しとの意味）、しかして、その不思議のお真実は、我等の罪業を何処までも衿哀（こうあい）まします慈悲なれば、そのお慈悲一つを仰がして頂かば、韋提希、阿闍世のごとく、あるべからざる不思議の如来廻向の解決を与えらるるが、我等の信仰上の解決の有様なりとのことを申し上げたかったものと思召し下されたく候。

すなわち、この点より申さば、如何ほど悪く行って居ろうが、如何ほど悪化して居ろうが、大悲不思議の御廻向の前には、問題にならざるわけにて、少々ぐらいの善悪は何等意に介したまうことはないではないかと申し上げたかったものと思召し下され度候。そのかわり、それは人間の小細工で、ああこう申したところが、そんなことでうまく行くと思わぬとの意味にて候。

信仰と母性

福島政雄

阿闍世王の物語の中で韋提希夫人の苦悩と信仰について、母性が如何に現れているかを述べて見たいと思います。

阿闍世王が釈尊の膝もとへ行こうということになった、その王を動かした力は何処にありますか。何が王をそうさせたかということを考えるのでありますが、それについて何よりも先ず韋提希夫人が問題になります。

韋提希夫人は観無量寿経に現れているところでは、極めて愚痴の多い一女性であります。愚痴というものは同じ事を繰り返してかえらぬことを繰り返すという形で現れるのでありますが、韋提希夫人がそのとおりであります。

「自分はなぜ阿闍世のような非道の子を産んだのであろう、釈尊の従弟にどうして提婆のような者が出来たのであろう」と繰返し言っている愚痴の女性でありました。その愚痴が仏の前で転じて懺悔となり、韋提希夫人が救われる一部始終が観無量寿経であります。

そも〳〵仏教の経典の上で女性をどんな風に考えられてあるかと言えば、一面にはずい分悪く言ってある。女のことを仏典ほど悪く言ってあるものは他に無いほどであります。「外面に菩薩のようで内心は夜叉（やしゃ）のようだ」ということも仏典に女の事として言われてあります。或は「五障三従（ごしょうさんしょう）の女人」とか、又これは男子を戒めた言葉と思われますが「たとい大蛇を見ると雖も女人を見るべからず」と言い、或は熱鉄をもって眼中をえぐるとも散心（さんしん）をもって女人を邪視してはならぬ」とか「女人は非常に罪深いものである故に魔王になることも仏になることも出来ない」と言って女性に対して此の上もないひどい言葉で痛烈に言ってあることが仏典の至るところにあります。

併しそういうことばかりではなく、随分仏典の中には母親を大いに讃美してあります。例えば心地観経報恩品（しんちかんぎょうほうおんぽん）では母親の徳を十もあげてあります。母親の懐胎十ケ月の苦労を言葉を極めて書きあ

らわしてあります。また勝鬘経（しょうまんぎょう）には、勝鬘夫人が釈尊の御前において十大受（じゅうだいじゅ）、三大願を立てます。この勝鬘夫人は非常にえらい女性として表（あらわ）されてあります。また華厳経には、善財童子が五十三人の善知識を訪ねて真の道を求める面白い物語がある。その善知識のうちで、一番大事な地位にある善知識の中に女の人が幾人かあります。殊にその最後に近い等覚（とうがく）の位に、仏のお隣のように近い位に摩耶夫人を現してあります。善財童子は成道の釈尊御自身の更に深い求道心を現すものでありますから、母親である摩耶夫人は釈尊にとりて極めて大切な善知識であるということになるのであります。それで此の華厳経では女性の地位は随分高いということになるのであります。

そこで結局仏典には矛盾があるということになりませんか。一方では女性をひどく悪く言い、他方では非常に高い位に置いてある。どちらが本当であるか疑問は起りませんか。それについて私自身の解釈でありますが、こんなことを考えるのであります。仏典における一番大事な問題は、女の善悪とかいう問題よりもその中でも賢夫人とか立派な母親とか言われる者は別として、一番愚痴の多い一番物のわからぬ無智の女人を救うことが、仏教の根本問題ではありませんでしょうか。そうすると章提希夫人のことは非常に大事な問題であります。愚痴無智の女性章提希夫人が、魂の底から救済されることは、やがて一切の女人の救済ということになるのであります。私はこんなに感じているのであります。

それから飜（ひるがえ）って考えてみますれば、仏典の中に女性を悪く言ってあるのに二つの意味があるようであります。一つは男というものは女の誘惑にかかり易いから、特に釈尊の教団では厳しい戒律を守ることになっているのに、女に対する執着を起す者がいろいろありました。あの迦留陀夷（かるだい）などは、一方では力量のある人であったが、女に対する煩悩の強い人でありました。その迦留陀夷などがひどい破戒の事をしたことが四分律（しぶんりつ）などに細かに説いてあります。戒律を破ってひどいことをするものがあるので、釈尊はこれに対しては痛烈に誡を下されました。そして女は恐しいものであるとて懇々と誡められたと思われます。

これは釈尊のお弟子だけの問題でなく、私自身の問題であります。私が十六、七歳から二十五、六歳までの間、私の母は毎日私に向って、女は大変おそろしいものである。女ほど恐ろしいものはないと、毎日聞かせたものでありました。その時は此の誡めをそれほどに感じませんでしたが、今日では母親なればこそ子の性質がよくわかるものであると思います。ほかの子よりも一番私が心配な性質を持

っている、これは今のうちによく教えて誡めておかねばならぬと考えたのでありましょう。これは私の性格を反省して考えられるのであります。釈尊の説法がそれと同じで男をいましめるために女を悪く言ってあるのであります。

それからもう一つはそんな意味でなく、釈尊が女性の自覚を促されたのであります。蓮如上人の御文には「末代の悪人女人たらんともがらは」と悪人女人ということが並べてあります。その悪人とは何を指すかといえば、男を指すのであろうと思います。女人は、その「悪人女人のともがらは」とある男の悪人に劣らぬ悪い心を持った女という意味であろうと思います。釈尊が女のことを非常に悪いように言われた、そのお言葉の中には、釈尊が一切衆生に対してのお慈悲という中でも殊に女性に対してのお慈悲が深かったことがお言葉にあらわれたのであろうと思うのであります。

釈尊御自身は男性であるから男としての自覚は深刻なものがあります。その御自身の上から、自分は女ではないが仮りに女の立場にあれば、斯様々々の事は自覚することになるであろうと、仰せられるのであります。つまり女性の自覚を促されたお言葉で、それは釈尊御自身の自覚から発するものであります。女というものは我ままを者であると、無理に押しつけられるのではない。押しつけては仏教の本意ではないと思います。自覚の教が仏教の根本であります。その教を聴く一切の衆生は、男は男の立場から、女は女の立場から自覚に入ることが釈尊の本意であります。それが仏教の本意であります。それ故釈尊が女を悪く言われることは、むしろ釈尊のお慈悲のお言葉であると思います。

凡夫同志である私どもでも、自分はこの人とは親しく打解けたいと思う時は、ひどく当って悪い事は悪いと指摘して行く、その心持は相手の心とすっかり打ち解けるところを求めているのである。面と向って相手の悪口を言って居る時は、相手と打ち解けたいと思って云っているのであります。いま仏教で女性を悪いように言われてあることは釈尊のお慈悲であります。押しつけではなく、自覚を促し給うお言葉であります。

章提希夫人は何の賢いこともない愚かな愚痴の止まぬ女性であります。此の夫人がどんなことで苦しんでいたかと申しますに、此の世ほどいやなところはない。自分の子は父を牢獄に幽閉し、母を深宮に押し込める。自分はどうしてこんなひどい子を産んだのであろう。此の世がいやでいやでたまらない。それで釈尊に向って、こんないやな世界から離れて、どこか清浄なお浄土に生れさせていただきたいと願ったのであります。釈尊は光明を放ってその中に様々の浄土を示されました。章提希夫人はそれらの浄土を見

阿弥陀仏て、の極楽浄土に生れたいと願うたのであります。

この観無量寿経の中で一番大切な所は、韋提希夫人の前に阿弥陀仏が光現したもう場面があります。お経ではこういう風に述べられてありますが、それは韋提希夫人のその苦しくてたまらない何とかして此の世を逃れたいと思うその夫人の心の中に入って来て、そんなに此の世を厭い逃げ出したいと思っているその夫人をどこ〳〵までも哀れみ、悲しみ、はぐくみ給う仏のお慈悲が韋提希の心に徹したということであります。それ故にお経には「仏心とは大慈悲是なり」とあります。阿弥陀仏の世界は西方十万億土のはるかなところではない。「此処を去ること遠からず」と言っております。これはもう少し突込んで申しますと、汝のその苦しみ悲しみの心の中に仏陀の生命は入り満ちて、汝と共に苦しみたもうということを釈尊は明かにされたものであります。ここに韋提希夫人の心が開けて来たのであります。今まで早く此の世を逃れたいと思った心が苦しみの娑婆そのものに落着くということになりました。苦しみが無くなったのではない。苦しみの中に、仏の親心の徹底があり、お慈悲に融かされて安住して行く境地が韋提希夫人の心に開けて来て、早く此世を去ってお浄土に行きたいという心が無くなるのであります。

教行信証では涅槃経梵行品（ねはんぎょうぼんぎょうぼん）から引用せられて、阿闍世王が後悔の心を起しているところが述べられてあります。父を獄中に押し込めて遂に殺してしまった。これが阿闍世の後悔の涙の種となり、非常に苦しみはじめるのであります。その心の苦しみが身体に現れ、身体中に臭い腫物が出来て痛み苦しむ。「心に悔熱を生ず」とあって身体も心も痛み苦しめられるのであります。此の時に韋提希夫人がどんな態度を執（と）ったか。これが大事なところであります。此の時韋提希夫人は様々の薬を作り阿闍世の身に塗ってやりました。ただそれだけのことでありますが、これが以前の愚痴の心にせめられている韋提希夫人そのままであれば、阿闍世が苦しみ始めた時、「それみたことか、お前はお前の父に対して一方ならぬ悪いことをした罪のむくいでいまそんなに苦しむようになって来たのだ」とせめたかもわかりません。ところが信心徹底した今の母は阿闍世の苦しみと共に苦しむという心をもって、黙して薬を塗ってやりました。苦しみ悩んでいる阿闍世を目の前に置いて看護する韋提希の今の生活は静かにその苦しみに従い、子の苦しみを我が身に負うているのであります。

以前は仏の世界を向うに求めて、此処を去って其処に往こうとしたのでありましたが、今は仏の世界を自分の背に負うています。仏のお慈悲の光に背中から照らされているのであります。あの遠い仏の世界に往きたいというのでなく、むしろその仏の光の中に包まれて、苦しみの中に苦悩を感じながらも静かに随順の生活をしています。丁度子供が病気した時、母親として為すべきことをしているという平凡な生活であります。

説法する母でもなく、まして意趣返しをする母でもない。子供と一緒に苦しんでいる。そして薬を塗ってやっているという簡単なことのようであるが、私どもが一番煩悶して苦しむ場合は、自分の為すべき仕事におちつき得ないで苦しむものであります。

人生問題の解決はどこにあるかと言えば、特別な神秘的な宗教的体験を得ることではなくて、信仰的解決は、各人が自分の平凡な仕事に還るというような境地で開けるのであります。こんな苦しい娑婆を早く逃れて、もっと楽しい世界に往こうなどと我ままな事を考えるのはまちがいであります。信仰生活について色々の特別な説明はいりません。教師は教師、農夫は農夫、商人は商人とそれぞれに仏のお慈悲をいただいて、苦しみの中におちついて行くということになったのが、人生問題の解決であります。つまり私共の平凡な生活におちつくことであります。

信仰、信仰と特別のことのように騒ぎまわって、自分の仕事はそっちのけにしていろいろ目に立つようなことを行なってというような信仰は怪しいものであります。そんなのは自分の人生問題におちついているのとはちがうのであります。一種の狂熱に過ぎないのであります。善導大師の仰せに、頭燃を払うようにして騒ぎまわるのは何の意味もないもので、虚仮の行、雑毒の善であると言われてありますが、私が思いますのに、信仰の生活が人生問題の解決になるというのは、息子をその父にかえし、娘をその母にかえすことである。これが人生問題の解決であって、此のほかには何もない。無自覚にまっしぐらに突き進んでいるのが、ふりかえって父親母親に帰るという平凡なことが成就することであります。つまり子供が真実に親のもとに帰るという平凡な問題であります。

阿闍世王の問題がそうであります。先ず直接には韋提希夫人という母を通して阿闍世王に響く親心、久遠の絶対の親心があります。そこに親の膝下に立ちかえろうとなって来るのであります。母の韋提希夫人の方は、汝の親のところにかえれなどと説法するのではなく、自分は自分で久遠の御親である仏の許へ帰ろうとして、ただ黙って子供の看病をしている。それによって子供には親心がひびくのであります。黙々としているその母の胸をとおして、阿闍世王に仏の親心がひびいて来るのであります。

（昭和四十四年六月二十一日）

人生問題と絶対他力の信仰

花田正夫

人生問題には沢山の問題があるが、要約すれば、善悪の問題と生死の問題になる。そしてこの二問題への根本的解決の道を与えられるのが絶対他力の信仰である。

一、善惡の問題

我々の生活の大部分を占めているのが、よし、あしの問題であるといってよい。あの人は親切なよい人だとか、腹黒い油断のならぬ人とか、ああしたことをされたから言いかえしてやったとか、あんな可愛い子だからもつとよくしてやらねば等々、無数といってよい。

㋑ 善惡への疑惑

我々は生れ出ると、伝統的、他律的な善悪の規範の中でよい子になれ、悪い道に入るなと、周囲の人々から繰り返し〳〵教えられてきたし、自分でもそうならねばならぬとすなをに従ってきた。学校ではよく勉強し、先生の言いつけを守り、友人と仲良くする等々であるが、そこに色々の疑問がおこって来る。

頭の良い友人はあまり勉強もしないのに立派な成績をとるし、また学生時代によく出来た者が成功するとも限らない、むしろ乱暴で先生を手古摺らせた者の方が、社会に出ては大きな活動している例などを見聞きするにつけ、今まで盲目的に従っていた善悪の問題に疑いを持ちはじめてくる。私が高校入試の参考書に

「判断は不確かなり、思想は浮動する」

とあった一句に共鳴させられたことを覚えている。善悪是非の判断も、年齢によって変動し、時代によって移動し、国境や人種を異にすると通用しなくなる。つまり。住む時代と住む場所と住む人々によって、自分達に都合のよしあしで決定しているもので、絶対的なものは見出せないことがわかる。印度のタゴールの詩に

何故に灯火は消えた
何故に灯火は消えた
お前を風から護ってやろうと思って

マントで覆うてやったのに
何故に灯火は消えた！

とある。又ドイツの短篇集に

秋の朝、庭さきの木に作った蜘蛛の巣に、蜻蛉がひっかかってもがいていた。すると大きな黒いダンゴ蜘蛛が飛び出してきて獲物をくるくると糸でまきつけはじめた。あまり可哀想なので蜻蛉を巣からはずして空に放ってやると、いかにも嬉しそうにヒラヒラと飛んでいった。

自分は救ってやったといい気持になって、一方の蜘蛛の巣を見ると、ダンゴ蜘蛛はいかにもいまいましくてならぬといった風に、破れた巣の隅に居て、力の限り巣をゆさぶって抗議しているようであった。

それを見た刹那に、救ってやったことがはたして善かったのかと心は曇った。

とあったのも当時深く心に刻まれた。

又、ツルゲネフの散文詩に、自然の女神がある。

地下の円天井の大きな部屋に一人の気高い女性が深い物思いにふけっていた、私は恭々しく一礼して、

「あなたはどうしたら人類の行末に、幸福を授けられようかとお考え下さっているのではありますまいか」

とおたずねすると、女性は悠然と、その暗いおそろしい瞳を私に向けて

「私はどうしたら蛋の脚をもっと丈夫にして敵の手を逃れるのに都合のよくなれる様にと考えているのだよ」

「何ですって、私共人類は、あなたの愛する子等ではありませんか」

と、私はききなおした、女性は眉をひそめて、

「天地の間に何一つ、私の子供でないものはない。私は皆同じように面倒も見ているし、皆同じ様に滅してやるんだよ」

「では理性は、正義は、善行は？」

と私は口をついで尋ねると、きびしい声で

「それは人間の勝手な言葉ではないの。私には善も悪もない、理性も私のおきてじやあない、一体正義って一体何のことなの……」と。

ツルゲネフには国家主義も人道主義も、人間中心的な利己心に我慢が出来なかったのであろう。

このように、盲目的服従時代がすぎて、自我時代がはじまると、善悪に対する疑惑が深まり、不可知となり、無定見の泥沼におちて行く。これはおそろしいことで、何もわからないのだから何をしてもよい、となる。しかし真実に求める心のある者には、そこは堪えられぬ暗黒界である、出口のない迷路である、何としてもそこを抜け出さねばな

らぬが、出口がない。こうした我々に歎異鈔の末文、

「聖人の仰せには、善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。その故は、如来の御心に善しと思召すほどに知りとおしたらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如来のあしと思召すほどに知りとおしたらばこそ悪しさを知りたるにてあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします云々」

とあり、又、聖人八十八歳の御筆に

「よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこころなりけるを
善悪の字しりがおは
おおそらごとのかたちなり。
是非しらず、邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」

とあります。この聖人の仰せによって、私自身に、是非善悪を知りとおす力のない、煩悩に覆われさまたげられて、身びいきな判断しか出来ない、愚かな身を知らされると共に、この私には「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との弥陀仏の本願の真実ばかりが光明を与えて下さるということを教えられた。

㋺ 相対の善惡は皆迷い

前に智的に善悪を徹底して知り得ぬことを述べたが、今度は、実践の上で善悪の問題を省みよう。

我々が例えば親切にしても、徹底的に実行出来ればやがて相手の冷たい心もとかすことが出来るが、限りある身の悲しさには相手の出方如何によってはすぐ崩れてしまう。

「道成寺、鱗（うろこ）が肌のぬぎじまい」

という狂句があるように、はじめ愛の睦び言を交わした安珍と清姫が、やがてその破局にあうと、美しかった清姫が蛇となって火を吐くようになる、鱗の生えた肌の本性まる出しとなることを警告している。

さて、他人様のことはさておき、自分自身は、となる時「とても絶対善、無限の慈悲などは思いもよらぬ身」と投げ出さざるを得ない。そこまで知れない間は、自分は人道主義者である、善人であると、一角立派な者と思いこんで、丸出しの利害打算の生活者をさげすんでいた。そのために相手の人からは、何だ聖人振ってと、にがにがしく思われたことであろう。これが相対善の害毒である。自分がすこし善いことを心掛け、また表面だけでもそれをやっていると、その反対の者に対し慢心をおこし、非難するが、相手もまた反駁する、そこには力と力との闘争がひろげられるばかりである。

それなれば、善いことをしながら、していると思わなければよいというけれど、執着の強い我々には不可能である。一番始末にこまる、手に負えないのは自分自身の心で

ある。

西哲が「神の手にある間はすべてが清らかであるが、人の手にうつると汚れてしまう」と云っているが、善を念じながら実践して行くと悪に落ちこんでしまうのである。

それなら、それであきらめられるかと云うと、それも出来ない。例えば、東京に用事がある人に、大暴風雨で交通が杜絶したとなるとじっとしては居られぬけれど、用事の無い人は、そうかなあで済ませる。今真剣によくならねばならぬとなっている者に、善悪も絶対的に不可知であり、また分りきった善も実行して遂に悪におちるとなると、そのままとどまっていることが出来ない。

ゲエテの語に

「すべて善良の人というものは、無力ではあるが不滅の願いとして、よくなりたいと思う」

とある。この不滅の願いこそ大切である。

さてこの悪ばかりの身、所謂「そらごとたわごとまことあることなき身」に、「ただ念仏のみぞまこと」とはどういうことであろうか。

私はこれを解く鍵として、歎異抄の三章と四章をあげる。四章には

「聖道の慈悲というはものをあわれみはぐくみたすくるをいう。しかれども思うがごとくたすけとぐること極めてありがたし。また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにいとおしふびんと思うとも存知の如くたすけ難ければこの慈悲始終なし。しかれば念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲心にて候うべき」

とある。我等の親切の末徹らぬことを知り抜かれて、そこに仏の本願があらわれて下さり、行きつまりのない大慈大悲の心にとけこませて下さるのである。

道綽禅師の安楽集に説話がある。

「親子三人で橋を渡っていた時、老母があやまって河におちた。長男は早速着のみ着のままで飛びこんで助けようとしたが、頻死の母がしがみついたので泳げず、共に浮きつ沈みつ溺れていった。これを見た弟は、橋の袂の小舟を見つけ、それをあやつって、二人を舟に救いあげた」

と譬え、凡夫が素手で人を救うことは不可能であるが、沈まぬ船として、弥陀の本願の船にのり、念仏の灯火に導かれよと結ばれている。このことは、私の鱗が肌の身に道を開いて下さった。

次に第三章に

「煩悩具足の我等は、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪

人もとも往生の正因なり」

とある。これ我々煩悩具足の凡夫が相対善悪の堺にあつて、そこからどうしても足の洗われぬ者への唯一の徳音である。

盤珪禅師は、不生禅を提唱して、

「血で血を洗うと、はじめの血はおちても新しい血でよごれる。」

と、我々が妄念を去ろうとしているのは、そのような繰返しであると警告し、又禅問答の中には

「熱心に坐禅の修行してさとりを得ようとしている弟子の傍で、大和尚が瓦のかけらを拾ってきてしきりに磨きはじめた。雲水がそのわけをきくと、磨けば玉が出来るときいたから自分も磨いているのだ、と答えた。雲水があきれていると、お前は坐禅しているとさとれると思っているが瓦を磨いて玉を求めているのと同じでないか」

と大喝されたとある。これらは、古仏の道を真剣に求めた和尚の大警告であるが、さてこの瓦礫同然の身、やることなすこと血で血を洗う無駄事の繰返ししか出来ぬ身は、何処に救いの光が射すのであろうか、聖人の

「煩悩具足のわれらはいずれの行にても生死のまよいをはなるることあるべからざる、地獄一定の身を憐みたまうて本願をおこして下された弥陀仏まします」

と仰言る。そして聖人はその本願を「かくの如きの我等がためなり」とも「親鸞一人がためなりけり」とも我が身にうけていられる。

この聖人の我が身にかけられてのお導きが、そのまま私一人のためと仰がれて、そこに闇が破られ、光が満ちるのである。

二、生死の問題

一般に仏教で生死といえば、生老病死の苦をさすのであるが、ここでは生と死の問題とする。

先日、或人が来られて、健康法を色々と説いて下さった。そして、自分は全人教育ということを提唱している。宗教家は唯心論にかたむき、科学者は唯物論にかたよっているが、自分は両方面をあわせているとのことである。そこで私は更に云った。精神面にかたより或は物質面にかたよるのはいけないが、そう言う貴方の説には、生のみあって、死が取り上げられていない。生も我であれば、死も亦我である、そうなってこそ全人的ではないか、と一考をうながした。人間誰しも死にたくない、長生きしたいのであるが、それほどきらいで、恐ろしい死が必ず身にふりかかってくるのである。そこに執着の強い者は、底しれぬ苦悩におちる。しかし或人は、自分はもういい年だから何時死んでもよいが、子供が独立して居ないし、病身で未婚の娘も

おるので死ねないという。その人にとってはそれはその通りに感じているのであるが、今一歩踏みこんで考えると、自分の死にたくない心は、自分はいい年なのでとひっこめて、息子や娘に変形しているにすぎない。これも死にたくない心情の一つである。

仏弟子、ビンヅル尊者が或王に説いたと伝えられる、黒白二鼠の譬は、この人生をよく言いあてられている。

「ここに一人あり。曠野に悪象の追うところとなれり。怖れ走れども依るべきものなし。たまたま一つの空井ありて、傍に樹根あるを見出し、根を尋ねて下り、身を井の中に潜む。時に黒白の二つの鼠あり瓦に樹根をかみ、また井の四辺に毒蛇ありてその人をねらう。下に更に毒竜ありて口を開きて呑まんとするを見る。更に樹根に蜂の巣あり、樹ゆらぎて蜂散じ下りてこの人を刺す。野火また来りてこの樹を焼く。されども、蜂蜜、日に五滴づつこの人の口中に落ち来る。この人蜜を得て後、憂怖苦悩を忘れて、その心中ただ五滴の蜜あるのみ。

大王よこの人の、この少味を貪りてかの無量の苦を忘るるは、また憐れむべからずや。

大王よ、この人はこれ余人にあらず。衆生の世楽に貪著（とんじやく）して大なる患いを思わざるにたとえたるなり。曠野は無明長夜の曠遠なるにたとう。象は無常なり。井は生死なり。嶮岸の樹根は生命なり。二つの鼠は昼夜なり。樹根をかむは念々生滅なり。四毒蛇は四大（地水火風の調和によって生命を保つが、これが不調になると病む）なり。蜂は邪念なり、火は老病なり、五滴の蜜は五欲なり。毒竜は死に喩える」

トルストイはこの説話を読んで震えあがったそうであるが、ツルゲネフの老婆という詩も、この東方の説話を読んで作られたものと想像される。それを要約すると

「私は一人で曠野を歩いていた。すると誰やら後をつけてくる足音がする。振り返るとボロをまとった腰の曲がった皺（しわ）だらけの歯無しの老婆がいた。

話しかけても一口も答えない、不気味であるがまあいいと、あまり気にもかけずに歩き続けたが、相変らず老婆がついて来る。

しかし私は歩み続けた、……その時、不意に何かしら穴の様な影が、道の行く手に黒々とひろがった。墓だ！あの中へ老婆は私を追いこむ気だったのだ。

私は一散に走る、けれども矢張り背後に足音がする。急に道をそれて見るが、老婆は離れない。足を停めると老婆もとめる、やがて行く手にはまたもや暗い穴が口を開ける。仕舞った！逃れられない！」

とある。

私は中学生の頃、兄と姉を亡くした時、感傷的に死の幻影にとらえられたこともあったが、それはやがて消えた。こうした私の三十五歳の時、肺浸潤で二年間療養し、四十六歳で敗戦後の混乱期に、心筋障害による狭心症になりそれからずうと、ありやなしやの閑居を続けて来た。肺疾の時はどうして早く治そうかに腐心し、心臓病ではヒビの入った茶碗も大切にすればと主治医から言い渡されて、好きな煙草もやめて何とか長持ちさせたいと心を砕いたが、死はまだ自分の問題とはならなかった。

ところが昨年初春、突然に多量の血尿、検診の結果、膀胱のクルミ大の腫瘍とのこと、早速名市大の岡教授とガンセンターの今永院長にお世話になって、一応の処置をうけて、今はたまゆらの安定を得ているが、この病気になっても、自分は今度は駄目ではないかとまではすこしも思わなかったけれど、どうしたことか、死の墓穴が私の前を塞いだ。

そしてその問題の解決がなければ人生の何処にも安住の生活は出来ないと知らされ、そこでは、外からつけた一切のもの、財産も名誉も知識も、友人も、親兄弟も、一切が空しくなり、地上のあらゆる言葉もうつろになってしまう。

そうした中にあって、夕陽が山の端に没して、夕闇がせまる時、大空に星と月が一段と光明を放つように、私に力強く、生き生きとひびいて来たのが歎異鈔のアチコチ、ことに次の一句であった。それは親鸞聖人の声であって、そのまんま仏陀の呼び声である。

「いささかの所労（わずらい）のこともあれば、死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩悩の所為（なしわざ）なり。久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里（ふるさと）はすてがたく、いまだ生れざる安養の浄土はこいしからず候こと、まことによくよく煩悩の興盛（さかんなこと）に候にこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて、力なくして終るときに彼土へはまいるべきなり、急ぎまいりたきこころなき者を、ことに憐みたもうなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じそうらえ、云々」

平素、無事息災の時は大言壮語する身も、いよいよとなれば、恩愛のきずなにほだされて、名残りはつきず、百方手を尽くして、力無くして終るより他に道のない身を、仏はかねてしろしめして、さもあろう、お前としては無理からぬことだと、全理解をもって寄りそうて下さる大いなる心にふれる。そこに、自分の死様はどうであろうとも、すこしも心配のいらぬ身と、やすらがせてもらえる。これを卑近な譬でいえば、庭で子供がパンを食べながら遊んでいるとき、不意に隣家の犬が現れて、パンを目掛けて吠えかかると、子供は驚きとおそれで大声で泣き出す。その声で

母親が飛んできて、子供を抱き上げてやると、母の腕の中で安心した子供は、今まで怖かった犬もこわくなくなる。丁度そのような心の変化があらわれる。

私の場合、平素読んだり、聞いたりしていた歎異鈔が、心に異様の感動をもって浮ぶとともに、今まで前を塞いでいた死の暗い闇に、明るい光が射し、道が縦横にひらけてきた。かと云って死が平気になったのではない、依然として死にたくないが、そのどうしても逃げられぬ死も、御理解ある仏の心にまもられて、死に様に何の心配もいらないやすらぎを与えられたのである。

禅家の碧巌録に

「寒暑到来いかんが回避せんと。洞山云く、何ぞ無寒暑の処に去らざると。僧云く、いかなるか是れ無寒暑の処。山云く、寒時は闇梨（じやり）を寒殺し、熱時は闇梨を熱殺す」

（註）闇梨とは僧侶の敬称。ここでは汝というに同じ。

これは寒い時は寒さになりきり、暑い時は暑さになりきれ、という意味である。良寛師の言葉に

「災難にあう時節には災難にあうがよろしく候、死ぬ時節には死ぬがよろしく候云々」

とあるのも同じこころであるが、さて一番いやな死に向って、逃げず、かくれず、それをわがこととして受け取ることは、普通には不可能事である。ここに、我々の全煩悩のすみずみまで、深い理解と慈悲をもって見て下さる方が一人あれば、自分の死様の如何に用事のない、どんな不様（ぶざま）の死様、たといほうけようが、狂おうが、そういうことを案ずることのいらね大安心を得られる。その大いなる心を聖人は、御自身のこととしてお知らせ下さるのである。この道はどんな人でも老少善悪の凡夫が万人へだてなく通入出来る道である。

たのまるる　ただ念仏のわれにあり　さるべき業はさもあらばあれ

と池山先生は、たのみ力になって下さる、たのもしい本願を身にうけられて、あらゆる業報を越えて行かれたのである。

或死刑囚は辞世の言葉に、

「生死の境に仏ましませば生死なし」

と讃えながら念仏裡に刑場から浄土へ還って行った。

以上、善悪の問題は、悪の壁に突きあたり、生死の問題は死の闇に塞ざされるけれど、そのことについて、無力無能の身も、大悲の願船がそこに通い、光明の彼岸に渡して下さるのである。

この大道のあること、この阿弥陀仏のましますことは、万人心にいれて頂きたいことと念じ長々とくどく記した次第である。

ともしび

聚墨生

高原の陸地（ろくち）に蓮華を生ぜず、
游泥（おでい）の湿地に蓮華を生ず。　（維摩経）

私は子供のころ、右手の親指が化膿して、いろいろと手当てをうけたが曲がってしまった。医師から、これ以上はもう、と云い渡されたが、夕方になると勤め先から帰った父が、幾日も〳〵マッサージをしてくれた。けれどもその指はちっともよくならなかった。

その父が亡くなって、もう四十余年になるが、曲がった親指を見るたびに、医師が駄目と告げてもなお捨てず、治らぬことを百も承知しながらも手当てしてくれた父の姿が浮かぶ。私は亡き父にありよい名所を持っておる。

久遠のみ親、仏心のまことを仰ぐ名所もまた綺麗なところではなく、してみようのない煩悩の泥田の中であって、われとわが身にあきれ、他からも捨てらるべきかたわのところにこそ、仏にあう唯一の名所がある。

○

我が光明を蒙りてその身に触れん者、
身心柔軟（にゆうなん）にして人天に超過せん。
（大無量寿経）

泣きながら帰った子供も、母の慈懐に抱かれると、涙がかわかぬうちに笑い声が出はじめる。また人生の岐路に迷うて途方にくれる旅人も、よき理解者の愛語にふれるとおのずから心ゆたかになり道がひらけてくる。

こうしたことは大なり小なりだれしも経験することであるが、さいわいに覚者（さとれるひと、仏陀）の御理解ある智慧に接し、未通った慈悲に触れると、氷雪が陽光にとかされるように、心のしこりがやわらげられ、とけてくる。

このやわらぎの心こそ、覚者が私どもに与えて下さる最大の賜物（たまもの）である。ここに心の垢が洗われ、よみがえる心をもって明日に向かうことができる。煩悩のさかんな、事ごとにひっかかって、力みとシコリのやまぬ私には、この弥陀仏のお誓いが唯一無二のたのみである。

○

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや
（歎異鈔）

ゲーテの詩に「無力であるが、不滅な願いとして、よくなりたいという望みをもつ」とある。われわれがもし相手の出方如何を問わず、よく理解して真実な心で何処までもやれば、必ず互にとけあうこともでき、人生いたるところ青山あり、といえよう。

そのようになりたい、とたえず願いながら、実際はいつも失敗に終わってしまう。そこに深刻な人生問題、社会問題の悩みがある。自分はよくしていると思うひとりよがりは実際に通用しないし、またいつかはよくなれようと思うのは美しい幻影にすぎない。

さて、現によくなれない身、大空をあこがれながら翼のない鳥の嘆きをむなしくくり返す者に、歎異鈔のこの慈語は唯一の救いの声である。地上の何処に、よくなれぬ身を見抜いて、その者にさしのべてくださる御手があろうか。

慕いよる蝶をもたおす毒草になおさしそうか天津日の影

と、このよろこびを詠じた人もある。

○

我れ必ずしも聖（ひじり）にあらず、彼れ必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫（たたびと）のみ
（聖徳太子憲章）

青年の頃、私は上役のやり方にひどく腹を立て、ブラリと職場を離れて街に出た。すると盲唖学校の生徒が二人、互に手を取って交通量の多い十字街道を無事に渡ってきて商店で買物をはじめた。盲人は口を、唖者は目をもって互いにたすけ合って事を弁じているのを見て、ハッと心をうたれた。

私は上役の人の欠点ばかりを責めて腹を立てているが、お互いに神仏じゃない、不完全な者同士で、この盲唖者とどこに変わりがあろうか！とひとりよがりの心を強く打ち砕かれて、太子の「共にこれ凡夫のみ」の一句が心に深くきざまれた。

しかし私のひとりよがりの心が、知らぬ間に絶えず起こって、正しい判断を失い勝ちであるが、そのたびごとに、太子のこの言葉が大きな灯火となって行手を照らして下さる

○

怨（うら）みは怨みによって消えず、怨みは怨みなきによってのみ滅す。　（法句経）

これは仏の教団が二分して争ったとき、釈尊が弟子達をいましめられた聖句である。またわが国では、父君が夜討ちをうけてひん死のとき、幼い愛児に、仇を討つな、とこ

の語を遺言し、これをうけて出家し、その解決を仏道に見出されたのが法然上人である。その後の日本に、激戦地の跡に、敵味方供養塔を建て、怨讐（おんしゅう）の彼方の光りをともどもに武将たちが拝むようになった。

さて仏教国セイロンの副音相ジヤエルワルデネ氏は、終戦のとき全権大使として、対日サンフランシスコ講話会議に臨み、「怨みに報いるに怨みをもってせず」と提唱し、自国の賠償権を放棄して世界的に反響を呼んだ。

「歯には歯を」という考えに終始する所では、こうした声は聞くことはできない。私どもはこの声明を聞いて、そこに仏の徳光にふれ深い反省をさせられるとともに、心から頭のさがる思いがする。

○

親鸞は弟子一人ももたず候　（歎異鈔）

弟子のない人が、もたず候というのであれば当然のことであるが、生涯を真実教の開顕（かいけん）に貫かれて、多くの人々を導かれた聖人の言葉だから驚く。ともすればありもしない力をあるかのようにふるまう世に、なんという無我な心境であろうか。

ある日、私は恩師を尋ねて師の徳を心からたたえたら、師は手を横に振って「いや悪いと解りきったことさえやめられないつまらない人間だよ。ただ強いて人と異なる点といえば、お念仏させて貰っていることだけ」と苦笑せられた。その時、私に直感させられたことは、月が美しく夜空に輝くのは太陽の光りの照り返しであるように、師の身心に受けいれられた仏心の照り返しの尊さということであった。

聖人は自ら愚禿（ぐとく）と名告られつつ、弥陀の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと仰がれて、ご満悦の生涯であった。そこに光りと暖かさを慕って自然に人々が集まり、聖人はその人々を御同朋と迎えられたのである

○

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり　（歎異鈔）

親は子がかわいいという、幾人あっても一人々々がかけかえがないという。しかし私には子がない、だからそうだろうとは思うが、そうだとは実感されない。砂糖は甘いと聞いてわかったのと実際になめて知れたのとは違うように

だが私にも親はあり、七人の兄弟もあった。そして親を思うとき、七分の一の親とはどうしても思えないで、私一人の親と感じる、しかも兄弟が幾人あっても妨げとはならない。

さて私がそうとしか思えぬのは、私をかけがえのないものと護念し続けた親心のたまものであると気づいて、一切

の衆生を一子の如く憐憫（れんびん）される阿弥陀仏を、「親鸞一人がため」と常に渇仰せられるお心にふれるとともに、親鸞とあるのを私とおきかえて「私一人がため」と何のためらいもなく喜ばせていただいている。

○

世間虚仮（せけんこけ）唯仏是真（ゆいぶつぜしん）　（聖徳太子の常持語）

ゲエテは「悪魔は悪をつねになしながら、かえって人に善い結果となって失敗する」といっているが、我々は誰も善を願いながら、常に悪に負けてしまう歎きにおちる。そこに思うことなすことの一切のむなしさがある。

仏はこの苦悩をかねて知り尽くされて、それをわがこととして、無限の大悲を注いでくださる。かくてそらごとたわごとまことあることなき身も、仏の真実心に同化させられる。

しかし、私どもは、そうした仏の真実心も知らず、ただおのれをたのんでさまよいあるき、悲しみとねたみといかりにとざされているが、幸いによき人の導きをうけて、この仏の真実を知らされるとき、闇夜に旭日を迎えるよろこびがある。

太子はこの慈光を仰がれて、厳しい現実をかえりみ、御自身の空虚さを悲しまれるとともに、それを満ち足らわせてくださる仏心のまことを喜ばれてこのように常に述べていられたと思う。

○

生死の大海に、誰か船筏（せんばつ）とならん、
無明の大夜に、誰か灯炬（とうこ）とならん。　（西域記）

俳人一茶の日記の余白に「兄弟二人それぞれ親の病を見舞った。兄は先に立ったが、暮れて前後も見えぬので道の塚穴に休んだ。弟は後から来てその穴に落ちたところ、兄は鬼が来たと防ぎ、弟は穴に鬼がいると思い、互いに乱闘したが、夜が明けて見ると、兄弟と知れた。生死の間に迷うていると皆無明の鬼に見える」と記している。

その頃一茶は継母や異母弟と遺産争いをして互いに憎み合う最中だったので、涙ながらにこれを書き入れたことであろう、私どもも強く心をうたれる。

昼間は平気な墓場でも、夜になるとおそろしくなるように、煩悩の黒雲におおわれた心はくらく、疑心は暗鬼を造り、苦悩のはてしない海がつづく。

ああ、だれが灯炬となり、誰が船筏となってくださるであろうか！仏陀こそ、実にその人である。

○

愛語よく回天の力あり　（道元禅師）

岡山の長島癩療養所で一日一日をよろこび惜しみながら世を去った明石海人さんの〃癩〃という題の詩を忘れることが出来ない。それは

十年前隣人がわたくしの生存をにくんだ
五年前はらからが！
今では自分自身が！
のこるはただ一人の母親だが
涙ながらに　生きていよと云う

とある。海人さんは発病以来いろいろな手当の術も尽きて療養所に入った。そこで好きな絵を画いて唯一の慰めとしていたが、病が進んで失明し、それも駄目になった。絶望のドン底に落ちた海人さんは度々自殺をはかるので日夜療友に見護られねばならぬという狂乱の状態であった。

その時、老母の「何でもいいから生きておくれ、お前の生きていることが私の唯一つの灯火だから」との涙の声にはじめて心の眼が開いた。すると目は見えないが耳が聞える、小鳥の声、松風の音、そこに詩が生れ歌が出来た。

○

煩悩眼を障えて見たてまつらずと雖も、大悲ものうきことなくて常に我を照らし給うといえり
（正信偈）

南条文雄師が英国留学中のことである。師と同じ留学生の科学者が、ある朝あわただしく訪ねてきて冷汗を流しながら、口早に、

「早朝街を散歩していると一人の坊やが泣いていた。わけを聞くとボール遊びをしていて誤って窓ガラスをこわしたのでお詫びをしようと、家人が起きてくるのを待っていたら悲しくなったとのこと。そこで誰も知らないのだから、そのままお帰りといったら、それでも神様が知っていられる、と答えた。自分はこの時ほど恥ずかしい思いをしたことはない」

と感無量の様子で物語ったということである。

私どもは人に見られさえしなければ、何をしてもよいという心を起すものであるが、実に恥すべきことである。私どもには見えないが、この盲の私共を大悲心をもって常にあわれみ照らし護って下さる仏がいますのである。

○

仏の本願力を観ずるに、まう遇うて空しく過ぐる者なし、能く功徳の大宝海を満足せしむ　（浄土論）

私の師は生涯一貫して歎異鈔を体読し、これを勧めて倦むことがなかった。しかし聞く者はそれぞれにうけて、或は数回読んで本箱にしまい、或は長い間忘れる者もあった。

私もそうした仲間の一人であったが、師と遠く別れ住んで数年後、あるきっかけから身も心も行きつまったとき、歎異鈔の一句に強く心を打たれ、それからはすすんで読むようになり、その都度あたらしく教えられ、それが年齢とともに深く身にしむようになった。友人にそれを話すと、僕もそうだとうなずき、段々とそうした友達がふえてきた。

歎異鈔は、仏陀（さとれる人）の真実の願いが、親鸞聖人をとおして私共に呼びかけ続けている書である。そしてそれを読む人に、時節が熟すると必ず信心の花と香り、やがて仏果の実を結ぶ不思議な書である。

○

恩愛甚だ断ち難く、生死甚だ尽き難し、念仏三昧行じてぞ、生死を難れ解脱せし　（和讃）

母を亡くし、続いて兄二人を失った私は愛別の悲しみの渦中に沈んだ。そして人様から同情を求め、あたえられないとうらんだ。

そうしたある日、自分は人様の不幸を真剣に同意したことがあるかと省みたとき、人様に同情など求める資格のすこしもないのに、それを要求して心の動揺しているわがままさにあきれた。

釈尊がかねて八苦の一つとして愛別離苦をあげられたのは、それが万人のがれられぬものであり、また如何ともすることの出来ぬ問題であるから、釈尊が御自らそこを超越せられるとともに、そこに苦悩する私どもをたすけとげようとの大悲心をそそがれていることに気づき、仏心を忘れて人に同情を求めた非を恥じながら、念仏が浮かび、悲しみの涙がぬぐい去られた。すると、不思議にも先立った母や兄たちは、私を念仏に帰らせるために生命を捨ててくれた仏様の使いと仰がれはじめた。

（以上、中日新聞、ともしび記載）

○

ただ念仏して

この道や
過去の諸仏の行きませし道
この道や
四方の諸仏のましますところ
この道や
未来の諸仏の生（あ）れますところ

この道を
われは歩めり故郷の道行くがごと
その道を
今日も辿れりやすらかにこころたらいて
その道を
われにたまえるよき人の仰せかしこし

昭和四十三年、成道会に。

あとがき

七月二十一日、人類がはじめて月の世界に一歩を入れた日であります。今もテレビはその模様を次々に放送しております。さてこの一歩のうちに八年の歳月と四十万人の力の集結と莫大な費用が投じられたことでありましょう。

テレビを見ながらその成功に驚異の眼を見張ると共にお念仏が私共の身にとどけられるうらに、どんな御苦労があったことかと、省みさせられて、五劫の思惟といい、兆載永劫の修行といわれることも、誓願の不思議の御働きをあらわすには、なお不十分であったことよと知らされ、念仏にかえらされました。月の世界に一歩を踏み入れることもさることながら、私共煩悩悪業の身にお念仏がとどくことはもつと〳〵不思議なことであります。

○

さて八月十五日の敗戦の記念日はまいりました。また広島と長崎での原爆の投下された痛痕事は、深く日本人の心に刻まれております。

この二十余年、よく堪え、よく働いて日本は経済の長足の成長を遂げましたが、孔子の「衣食足りて礼節を知る」と云う名句も、修正をせねばならぬ現状であります。即ち大人は自信を喪失し、青年学徒は暗中摸索の現実相であります。

それにつけても聖人の「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」との仰せが、私共の行く方を照らして下さいます。

「まことあることなき」を見抜かれて、その者を人格の無上完成せしめずばおかじとの、真実心からさしのべられる御手を頂くのであります。

相対差別の五分五分の世界では、まことあることなき身を見抜かれると、あきれられ、すてられるのが鉄則でありますのに、虚仮不実の身とはなれたまわぬまこと心、この絶対の真実心のみが、無明の大夜を照らす大きな灯火であります。聖人は、御身にそれをうけられて、切々たる悲心をもつて、法灯を掲げて下さるのであります。

○

八月は近角常音先生の御忌月でありますので七月号に御法話を頂き、本月号は、九州の故堤重蔵氏にあてられた御法信をいただきました。先月は不思議にも、その御子息堤謙治さんの来訪と、善樹さんの電話をうけ、又、重蔵氏の正月に一族の集いで、信仰問題を懇々と語られたテープを頂いております。鳥まさに死せんとしてその声かなし、人まさに死せんとしてその声やよし、と昔から云われましたが、いつか堤家のお許しをうけて、皆様にも読んで頂きたいと思います。

御案内

毎月、第一、二、三、日曜、午后一時半、一道会例会。

毎月二十四日、午前午后、市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎

名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十一巻第八号　昭和四十四年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可